師弟関係の僕ら

塩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
師弟関係の僕ら

【Ｎコード】
Ｎ０６５９Ｘ

【作者名】
塩

【あらすじ】
誰かが言った。――力なき者はただの道具、と。僕は、強くなりたかった。大切な人ぐらいは、自分の手で守りたい。たとえ、もう手遅れだとしても。

序章～物語は始まっていた～※イラ付（前書き）

流血シーン、下品な発言が苦手な方は読まないほうがいいと思われます。

序章～物語は始まっていた～※イラ付

＞i31938―40058＜
友人作※転載保存禁止※

「あっ、私。カランだけど」

「やっぱりあんたの言うとおりみたい。最近違和感を感じる」

「いつまで観察を続けたらいいと思う？」

「異変が起きるまでって……なにかが起きてからじゃ遅いでしょ」

「笑い事じゃない！」

「……まぁもう少し様子を見る。私だって人が傷つくのみたくないし」

「さすがの私も、学校中のみんなを守ることはできないよ」

「けど、毎日頑張ってるんだからね」

「気持ちのこもってない応援ありがとう。それじゃ、また連絡するわ」

電話を切る。沈黙の中、私は会話の内容を振り返った。

……強く、ならなくちゃ。

横に置いてあった木刀をつかみ、せまくるしい談話室から出る。

急ぎ足で向かう先は、生徒用訓練場。
気は抜けない。いつでも、どんな敵が来てもいいように。
少しでも、少しでも――強くなるんだ。

＊物語は始まっていた＊

一章〜二人が出会ったのは偶然、誰もが思った〜

あたたかな風が、僕たちの間に吹き込んだ。どこからか、花の香りがする。
そんな穏やかな場所で、僕とヴェイル先輩は深刻な面持ちで向かい合っていた。
「いいか……絶対に目をそらすんじゃねえぞ」
短く刈られた髪。両耳にピアス。パッと見ると不良と勘違いされそうなのがヴェイルだ。今のように鋭い目つきで見られると、眼力だけで三人は倒せそうなほど、迫力がある。
「え、あっ、ちょ……ちょちょちょちょちょっと待って……心の準備がまだ出来てないんだけど！」
「待たん！」
ヴェイルが素早く僕に近づく。彼の片手には木刀。
「……う、うわぁっ！」
とりあえず、反射的に横へかわす。
「だからかわすなって言ってんだろっ！」
木刀が横へすべりこみ僕の右横腹を狙う。――こっちも、木刀で受け止める。
「おっ、なんとか防御はできるようにはなったか？」
「何日練習してると思ってるんだよ。さすがにこれぐらいは」
とか言いつつ、実のところ相手の力に圧倒されている。僕は木刀を握る力をこめ、ヴェイルの木刀を振り払おうとした。
しかし、彼の木刀が離れたかと思ったと次の瞬間。次は、左の横腹を狙われた。
「うぐッ！！」
直撃だった。目の前が白くなる。そのまま、僕は草の上に倒れ込んだ。
「ったく、最後まで油断すんなよな」

「……う、ぁ……」
激しくせきこむ。周りの景色がゆがんで見えた。
「しんどいか？そりゃあ力こめたからな」
「……大人げないって、ヴェイル」
「まだ俺は大人じゃないから。あ、立てるか？」
手を差し出される。弱々しく首を横に振った。
「気持ち悪……」
「……お前、本当に打たれ弱いよな」
さっきの攻撃は……いくらなんでも強すぎだったと思うんだけど。
「しゃーねえな、ほら、医務室までおぶってやる」
ヴェイルが、しゃがんでくれる。ゾンビのような動きで背中にしがみつく。
「あ、ありがとう」
十五という年で、おんぶされるなんて恥ずかしいことだろう。でも、毎度のことだから慣れてしまった。
「お前……また軽くなったんじゃね？ちゃんと食べてんのか」
軽くジャンプされる。今の僕にとっては、その振動さえも意識が薄れる威力があった。
「……食べてる。早く医務室運んで」
「はいはい、じゃ、行くぜディオ」

医務室へと続く廊下を歩きながら、ヴェイルが口を開いた。
「なぁ」
「……なに？」
「入学してから何ヶ月になるっけ、お前」
「明日で2か月になる」
弱い自分を変えたくて、ここ――ペルクール学校に入学した。……それなのに、僕は全く変わらない。
「……マジか！」
「なんでそんなに驚くのさ」

「入学したときと全然変わってねえじゃん。弱々しさとか弱々しさとか……うげげげ」
思いっきり首を締めてやる。おんぶされているとこういうとき便利だ。
「ギブギブ！！……悪かったってディオちゃん」
「わかってる、自分が弱いことぐらい。……そんな自分が嫌だから……ここに来たんだ……」
2か月前、住んでいた村を出てこの国の軍学校に入学した。とある出来事をきっかけに。思い出すだけで、額に冷たい汗がつたる。
――悲鳴。悲鳴。悲鳴。そして、血。
「……あー悪い！嫌なこと思い出させちまった」
黙り込んだ僕に、なにを思ったのか謝罪の言葉を述べる。
「なんだ。気にすんな！まぁディオがここに来たときはかなりビビッたけど……村にいたときみたいに楽しくなったし」
「……うん、ありがとな」
ヴェイルは僕の幼馴染だ。入学する前までは毎日のように遊んでいた。とても仲がいい――それなのに僕は、ヴェイルに軍学校にきた理由を話していない。
話したくても、話せないというのが現状だ。ヴェイルも気をつかってくれているのだろう、深く聞いてこない。いつになったら言えるだろうか。
「ほら、医務室だぜ」
「あっ、うん」
「じゃましまーす」
明るいあいさつでヴェイルがドアを開く。消毒液のにおいが、鼻をさした。
「はいはぁい」
若い女性の声が近づいてくる。薄ピンクのスーツの上に白衣をきた、色っぽい先生だ。さらさらのロングヘアがたまらない、とヴェイルがよく言っている。

「どなたですか？あぁ、またあなたたち？」
マレンダ先生が大げさに驚く。
「毎度毎度悪いっす。まぁた、ディオが倒れたんでベッド借りてもいいですか？」
またを強調するな！
「はいはぁい、ベッドなら空いてるわよ」
白を基調とした広い医務室。壁際にはベッドが3つ等間隔に置かれているだけの質素な部屋だ。薬品は隣の倉庫にしまってあるらしい。
「さぁディオくんどうぞ」
真っ白な白衣をゆらし、シーツのしわを整えてくれる。そして、僕は思いっきりベッドに投げつけられた。
「ごほっ」
「永久に眠れ！」
「言ってることはかっこいいけども！怪我人を投げつけるなんて最低だ！」
「相変わらず仲がいいわね」
「どこがですか！？今の状況でどうみてそう見えるんですか！！」
マレンダ先生も……相変わらず抜けている。
「おいおい、怪我人は黙って寝てろよ。先生、こいつの腹見てやってくんねえかな」
「今日はお腹なのね」
先生は、微笑を浮かべ僕の制服をめくる。青紫色のあざが広がっていた。見ているとさらに痛くなってくる。
「これはひどいわねぇ。ヴェイルくんがやったの？」
「はい、もちろん」
なぜ誇らしげなんだろう。普通謝るとこだと思うんだけど。
「とにかく急いで冷やすことにしましょう。氷、氷っと」
先生は、カーテンを閉めて隣の部屋へ行った。
「ここまで運んできてくれてありがとな、ヴェイル。一応お礼を言

っておく」
「いつものこった、気にすんなよ」
ヴェイルが、ベッドの端に腰をかけた。
横を向いて寝ると、横腹が苦しい……。仕方なく仰向けで寝る。
「なぁ」
ふと目を閉じると、ヴェイルが声をかけてきた。
「……なに」
「ちょいと前に実技試験があったとか言ってなかったけ？」
実技試験？　あぁ、木刀の扱い方みたいなやつ？
「……」
「受かったのか？」
「……」
嫌なことを思い出させたな。
「おーい、ディオくーん？」
……答えないのも悪いと思った。
「受かった……って言ったら嘘になる」
「やっぱり不合格ね」
「やっぱりってなんだよ！！」
さりげなくひどいよな、この人！
「仮にディオが受かったなら、わーい受かったよヴェイルお兄ちゃん！って自慢してくるだろうから」
「ねぇ、ヴェイルの頭では僕ってどんなキャラなの？」
「にしても……」
あ、無視した。
「第一実技試験だろ？基本中の基本だろ？それすら合格できなかったのかよ。ヤバいぜ、ディオ」
「う、うん。先生に言われた。第一実技に受からなかったのはお前が初めてだって」
「すげえ……学校中で名前が知られてんじゃねえかお前」
「不名誉だ――！！」

でも、ありえなくもない。最近やたらと冷たい視線を感じるし。
「このままだと留年すんじゃね？」
心の底から笑われる。完全に否定できない自分に泣けた。
「先生にも言われたし、それ。だから特別講師をつけられた」
「はぁ？特別講師ぃ？」
「うん、学年上位の子だって。いい人だからよく教えてもらいなさいって」
「講師っていうのに、同じ学年のやつに教えてもらうのかよ」
「えーっと……ひまな先生がいないんだって。そしたら、その人が自分からやるって言ってくれたらしい」
僕のために時間を費やしてくれるなんて、相当いい人だろう。
「たしかに、ディオは俺の修行じゃ成長してねえしな。もっと上手い人に教えてもらったほうがいいだろ」
「僕もそう思う」
「ちょ……ここは、ヴェイルも上手いぞって褒めるとこじゃねえの？」
「はいはぁい。ディオくんお待たせ」
ロングヘアをたなびかせながら、マレンダ先生が戻ってきた。
「これでよく冷やすのよ」
氷がたくさんつまった袋を受け取る。お腹に当てると、痛みが少しラクになった。
「で？その特別講師についてもっと詳しく」
「あら、特別講師？なんの話？」
ヴェイルのバカ！空気を読め！
「あっ、いやっ、ななななんでもないですよ」
「マレンダ先生、こいつ第一実技に落ちたんっすよ」
「うぁぁぁぁぁぁ！なんで言うんだよ！」
悪びれてない笑顔がムカつく！
「……あらまぁ」
先生の哀れんだ目が痛い！

「それで特別講師、ね」
泣いてもいいですか。いや、泣かせてください。
「……はい。その人は、学年でも飛び抜けて成績がいいらしいです。それに先生からの期待も大きいらしくて」
だんだんと声が縮んでいく。
「お前とは正反対だな」
「ストレートに言わないでくれるッ！？」
「そうなのね。その講師にたくさん教えてもらえるといいわね、ディオくん」
「……はぁ」
ため息ともとれる返事。
「その講師が女の子だったらいいのにな。かわいい子だとなおよし」
ヴェイルが立ち上がった。
「……勝手に言ってろ」
「かわいくねーな。んじゃ、俺午後の授業があるんで」
あぁ僕も授業いかないと……また先生に怒られる。体を起こそうとしたが、
「ふごごごごごご……」
無理だった。
「あ、ヴェイルくん。授業が終わったあとディオくんを迎えにきてあげて。こんな状態じゃ帰れないだろうから」
「了解っすー」
先生、本当にありがとう。
「……ごめん、ヴェイル」
「いいってことよ、お大事にな」
片手をあげて、カーテンの向こうへ姿を消す。
「いい友達をもったわね、ディオくん」
マレンダ先生が、色っぽく笑う。
「本当なら、立場的に先輩後輩なんですけどね」
「いいじゃない、大事にするんだぞ」

お茶目に言われた。でも、なんとなく言葉に深みがある。
「どうも……」
「それで悪いんだけど……私今から急用で、行かなくちゃならないのよね」
「えぇっ！またですか」
最近多い気がする。
「誰かきたら自分でどうにかするように言ってほしいの。いいかしら？」
いくらなんでも適当すぎません！？
「わ、わかりました」
「本当にごめんなさいね。それじゃ！」
「いってらっし――」
すでにいなかった。おそるべしスピード……。
……一人になった。まあ、よくあることだ。やることもないし、お腹を冷やしながら寝ることにする。

＊　＊　＊

「失礼します」
澄んだソプラノの声で目を覚ました。誰かが来たらしい。
「……マレンダ先生？」
声からして女の子だろう。カツカツと靴をならし部屋に入ってきた。
「……はっ」
そのとき、自分のお腹に異変を感じた。異様に冷たい。
布団を持ち上げて下を見る。氷の袋が破れてぐっしょりとシーツが濡れていた。
ヤバい。なんか漏らしたみたいだ。
「マレンダ先生？どこです？」
これ、見られたら絶対に引かれる！布団で隠そうと思ったとき、

カーテンが開いた。
「マレンダ先生？」
「あ」
遅かった。
金髪に縦巻きロールという華やかな髪型。白い肌に、大きな瞳は一見可愛らしい印象を受ける。だが、今の険悪な表情では、そんなこと一ミリ足りとも思えない。
「…………誰」
「……………………あ、あの」
「ベッドで漏らすなぁぁぁぁぁぁ！！」
女の子は侮蔑と気持ち悪さが混じった悲鳴をあげた。
「誤解だぁぁぁぁぁあああああああ！！」
それをかき消すように僕も声をあげる。
「なにが誤解よ！バカ！」
女の子は手を振り上げた。その手には長い棒が握られて――え？木刀！？
「ただの水なんだぁぁぁぁあああ！！」
身の危険を瞬時に察する。せめてもの防御として顔を背けた。
「……ッ？」
しかし、いつまで待っても訪れない痛み。不思議に思い、ゆっくりと顔の向きを戻す。
顔がひきつった。眼前には、木刀。ぎりぎりのところで止めたらしい。
「水？」
女の子は、整った顔をゆがませ、疑問を表した。言い訳のチャンス。
「お腹にあざが出来てさ、それで氷で冷やしてたんだ。そしたら、袋が破れたらしくて、シーツが濡れてさ……いや、漏らしてないぞ！これは本当！」
「あざ？氷？へぇ？」

僕の言葉を確かめるように、シーツへと視線をやる。
「な、納得してもらえた？」
「……えぇ。いきなり悪かったわ」
木刀が、顔から離れていく。助かった。
「まぎらわしいことしないでよね」
嫌悪をあらわにして、女の子がポツリ。
「したくてしたんじゃないけどな！」
聞いているのかいないのか、質問してくる。
「マレンダ先生は？」
僕は言われてた言葉をそのまま伝えた。
「先生なら急用でいない。怪我なら自分でなんとかしろとのことだ」
「かなり適当ね」
呆れた口調でつぶやく。女の子は隣の部屋から、包帯と消毒液を持ち出してきた。そして、ひとつのベッドを机替わりにして、手当てを始める。
「どこか怪我したのか？」
「……じゃなきゃこんなとこ来ないわよ」
おそらく腕を怪我をしたのだろう。背を向けて、一人で包帯を巻いている。
……手馴れた様子だった。
「手伝おうか？」
「気持ちだけ受け取っておく」
「きみ、武技科だよな？自分で治療とかできるのか？」
このペルクール学校には、一般授業、武技科、療治科がある。一般は必修科目となっているが、残りの二つは選択科目となっている。
そして、選んだ科目で制服が違う。女の子が今着ている制服は、武器を扱い、戦闘能力を高めるための武技科だった。
「これぐらいの治療、基本でしょ。誰でもできるじゃない」
早々に治療を終えたのか、道具を片付け始める。
「療治科はどんな状況であっても、応急処置ができるように、もっ

と詳しく教えてもらえるの。だから、頭がよくないと授業についていけない。武技科よりも多くのことを勉強しないとだめ。要は私向きじゃないってことよ」
……知らなかった。療治科の方が難しかったんだな。
「あんたじゃ１００％ついていけないね」
「だろうね。いや、え？」
さっき、自然とバカにされなかったか？空耳かと思っていた僕に、女の子はさらに追い打ちをかける。
「学年の底辺って呼ばれてるあんたじゃ無理ってこと」
「初対面で心ズタズタだ――！」
なにこの人！見ただけで人の学力とか判断できるのかよ！
「僕のこと知ってるの？」
「知ってる。ディオでしょ。学校一の雑魚って色んな人から聞くわ」
「知りたくなかった新事実――！」
うわっ本当に有名人じゃん！嫌な意味で！
心の奥からわき上がってくるさまざまな感情を、ベッドに思いっきりぶつける。女の子は、冷えきった声で、
「見た感じ雑魚そうね」
「見た目で判断しないでくれるかな！」
「じゃあ強いの？」
「……いや、まだまだですけど」
今日は、なんだか悲しいことがいっぱいだなー。僕は、そっと目尻をぬぐった。
「あんた、なかなか鍛えがいがありそうじゃないの」
「喜ぶところ？ねえ泣くところ？」
「明日から、特訓開始だから。特別生徒用訓練室に来なさい。さっさとそのお腹、治しなさいよ。痛くて動けないとか言ったら半殺しってこと覚えておいて」
さりげなく物騒なこと言いましたね。
「それじゃね、雑魚」

去り際に、彼女は笑顔を残していった。僕が今まで見た中で一番、鳥肌の立つ笑顔だった。

「あ、名前聞くの忘れた」

……って、僕のこと雑魚って呼ぶのかよ！

二章〜孤独の中、彼女はその時を待ち続ける〜

――カランって武器の扱い上手いよな！
――将来、軍人として活躍しそうよね。いいなぁ。
いいな？どこがいいんだろう。強くなって、人を傷つける軍人になって……なにかいいことなんてあるの？
私には分からない。
でも、強くない私なんて誰からも必要とされない。
誰にも気づかれないまま、ひっそりと消えていく。そんなの嫌だ。
だから、私は――強さを求めている。
木刀を磨いていた手を止めた。顔をあげる。
誰かが世話をしているのだろう、色とりどりの花が目を楽しませてくれる。少し冷たい風が吹く裏庭。ここでベンチに座り、武器の手入れをするのが日課だった。
この木刀もだいぶ傷んできた。武器の傷は自分の傷、と教えられた。本当にそうなら私の心は、きっとボロボロだろうな。
「ちょいとそこのお嬢さん」
なんだか不良のような人が声をかけてきた。
「私？」
「そーそー、可愛いきみだ」
両耳にピアスをつけた男が優しい笑顔で近寄ってきた。
制服の胸ポケットについた校章の色は緑。上級生か。
「なんですか？」
こちらも笑顔で返す。可愛いと言われて嫌な気はしないから。
「深刻な顔してどうしたんだ？」
「え？そんな顔してました？」
自分の頬に手を当てる。
「ま、見ないと分かんねえよ。……なぁ、こんなとこでなにやってたんだ？」

「木刀の手入れです」
不良は、隣にあった木刀に目を移した。
「それ、きみの？ちょっと貸して」
他人のものを見てなにかわかることでもあるのだろうか。不思議に思いながら、一本を手渡す。
「結構使いこんでんじゃん。……油も塗ってんのな。しっかり手入れされてる。すげえ」
色んな角度から眺めたあと、そう感想をもらした。
「ありがとうございます。先輩は今から帰りですか？」
「正解。そのまえに、医務室にいるダチを迎えに行かなくちゃなんねえんだけど」
医務室？……雑魚のことか。そっと右腕をさすった。袖で隠れているが、替えたばかりの包帯が巻いてある。
「それは大変ですね。早く行ってあげてください」
「どーも、そうさせてもらうぜ」
不良が木刀をこちらに向ける。てっきり返されるのかと思って手を伸ばした。
しかし、違った。
「お前、もしかしなくても強い？」
さっきまでの笑みはどこかへ。真剣な眼差しをしていた。
自分では人並み以上の実力はあると思っている。でも、言いづらい。
「一勝負、どうだ？」
不良は、面白そうに目を細めた。どうせひまだし、いっか。
「やらせてください」
「そんじゃ悪いけど、この木刀借りるわ」
私はもう一本の木刀をつかみ、立ち上がった。
「よし、じゃあどっちかが参ったっていうまでな」
小さくうなづく。
背筋をのばし、深く息を吸った。そして、不良の方へ目をやる。

「どっちから行く？」
不良は、余裕を見せている。構えることすらしなかった。
「……」
なんというか……ずいぶんと意欲的な態度ね。しかし、あれは彼なりの挑発法なんだろう。冷静さを失ってはだめだ。
視線をそらさないまま、相手の動きを待つ。
私が向かってこないのがつまらなかったんだろう、不良が動きを見せた。
「俺からいかせてもらおうか」
木刀に力をこめる。不良はまっすぐに距離をつめてきた。流れに乗って、木刀を後ろにひく。
突き出す気だろう――先読みをして、身をかがめる。しかし、剣は私の方へと流れてきた。
とっさに木刀で受けとめる。威勢のいい音が響いた。
「すごいですね」
私が下に潜りこんだ瞬間、木刀の向きを変えるなんて、いい反射神経してる。
「いやいやきみも。受けとめられるとは思わなかったぜ」
動きはたしかに俊敏だ。でも、わずかに遅い。これの程度なら、余裕で木刀でカバーできた。
次々と叩き込まれる木刀を受け止めていく。不良が、小さく舌を打った。
「なぁ……攻撃はしてこねえの？」
そう言うなら……。左手で木刀を支え、横から殴りこむ。
「よっと」
不良は上半身を反らしたあと、素早く反撃。全力で木刀を振ってきた。
「ッ！？」
身をおどらし、横へ転がりこむ。標的を失った刀は、芝生へとめりこんだ。

「……な、な」
なにこの人……いきなり真剣になって。
こんな威力の振り、もし当たったら痛いじゃすまされない。
「あ、わりい。ついマジになっちまった」
反省の色が見られない笑み。
「いえ……大丈夫ですけど」
乱れた前髪を軽く整え、もう一度、戦闘態勢に入る。すると、
「いて！」
不良が木刀を落とした。表情をゆがませ手首を押さえている。
これは……誘導作戦？警戒心を解くことなく、にらみ続ける。
「あー」
不良は困惑した表情を浮かべた後、
「参った」
両手を挙げた。
「どうしました？」
私は体の力を抜く。
「……手がしびれる」
「あぁ」
木刀を打ちこんだときの衝撃だろう。不良の手首を軽く握る。
「痛くないですか？」
「全く。お嬢さんの柔らかい手のおかげで回復しました」
「変態ですか？」
「それは誤解です」
手首から手を離し、自分なりの考えを言う。
「多分一時的なものです。気になるようでしたら先生に薬をもらうといいですよ」
「詳しいんだな。ありがとよ」
私は落ちていた木刀を拾いあげた。
「先輩、強いですね」
ちょっと疲労感のある笑顔を浮かべる。

「んなお世辞、いちいち言わなくていいんだぜ」
「……そんなことは」
まあ、お世辞だけど。大体この人、前半は力抜いてたし。
ごまかすために、話を変える。
「そろそろ医務室へ行った方がいいんじゃないですか？友達、待ってますよ」
「やべえ！忘れてた」
ひどいな。けど、たしかにあの人影うすそう。
「んじゃ行ってくるわ。時間とって悪かった。あ、あとな」
「はい？」
「次やるときは、本気出してくれよな」
……あぁ。気づいてたんだ。
「本当は俺なんて楽勝に倒せるんだろうけど……今度はお互いマジでやろうぜ」
「楽しみにしてます」
今度、か。
不良の背中を見送る。私は、ひとつ息を吐いた。
「で、急用は済んだんですか？マレンダ先生」
私は後ろに声を飛ばした。
「なんだあ、気づいてのね」
花壇から人影が起き上がった。医務室担当教師、マレンダ先生だ。
「気づくもなにも、体の半分以上隠れてなかったですよ」
最初見つけたときは、鼻で笑った。でも、必死に無表情をつくっていた。
「でも、彼の方はなにも言ってこなかったじゃないのー」
「言わなかっただけで、気づいてたと思います」
なんで、この人はこんなに抜けているんだろうか。突っ込んでも突っ込みきれない。
「じゃあ今度はうまく隠れてやるわよ」
「……好きにしてください」

「にしてもヴェイル君が戦っているとこ初めて見たわぁ。かっこいいわねえ、思わない？」
にこにこと話を続ける先生に、私は、真面目に問いかける。
「先生、聞きたいことがあります」
「……はいはぁい、言いたいことはわかるわよ」
先生も笑みを消す。
「カランちゃんとの話題なんて、ひとつしかないものねえ」
空気が、急に冷えきったような気がした。
「なら教えてください。イル・モンド……最近はどんな動きを？」
イル・モンド。この国の各地で、殺戮を繰り返している、黒装束を着た謎の集団。ここ数ヶ月で、奴らによる被害が拡大している。
先生は、遠くを見つめて口を開いた。
「さっき緊急会議が開かれたのよ。そこで聞いたことを教えてあげる。……やっと国が措置をとりはじめたわ」
「本当ですか！」
これはいい情報だった。
「えぇ、軍学校の卒業生で、成績優秀だった生徒は、各地に派遣されるとのことよ。これで、奴らの動きも少しは収まるんじゃないかしら」
「……そうだといいんですが。でも……でも警戒体制を強化したとしても……誰も殺されないわけじゃない」
たかが派遣程度で、イル・モンドの勢力が簡単に衰えるなんて思えない。だって、あいつらは……最悪で最凶だから。
「こーら、そんな顔しないの。えいっ」
「……え？ちょっ」
頬をつかまれた。左右、上下といろんな方向に動かされる。
「あははは、かわいいー」
強い強い！引っ張りすぎ！
「いひゃいんでふけど！ひょっと！」
「あらあらぁ、ごめんなさいねえ」

赤くなっているであろう頬を優しくささる。
「カランちゃん、そんな自分一人で背負っちゃだめよ？イル・モンドのことは、みんなで……国にいるみんなと協力していかなきゃならないんだからね」
「協力、ですか」
「そうそう。ゆっくりはしてられないけど、あせらず行きましょ？」
あたたかな笑顔。この人は、すごい。いつも頼りないくせに、なぜか信用できてしまう。少し、気がラクになった。
「ありがとうございます」
「あ、わかってると思うけど、話したことは……」
「えぇ、絶対誰にも言いません。そのかわり、また新しい情報があれば教えてください」
「わかったわ。これぐらいのことしかできないけど」
先生は、大人の雰囲気でウインクをした。私は首を横に振る。
「ありがとうございました」
「どういたしまして、帰るの？」
「これから、もう一度特訓をしてからです」
日が暮れかけている。沈む前までには、寮には帰らないといけない。
「……あまり強さに執着すると、自分が壊れちゃうわよ」
「えっ？」
「特訓、頑張ってねえ。それじゃあ」
いつもの調子で、先生は行ってしまった。
……あの人は、頼りなくて、それなのになぜか信用できてしまって、どこか重い過去を持っている気がする。不思議な人だ。
「……さ、頑張りますか！」

三章～後悔しても、あの人はもういない～

「どうしたの、ディア。木刀の素振りなんかして……」
――安心して。お兄ちゃんは私が守ってあげるから！
「……はぁ。いきなりどうしたのさ？」
――だって、お兄ちゃん弱いもん！
「うがぁっ！精神的にショック受けることを笑顔で……」
――私、１５歳になったら絶対にペルクール学校に行く。それでね、強くなって戻ってくる。お兄ちゃんもこの村も、私が守るよ。
「女の子が軍学校とかさ……やめなって。強くなってどうするんだよ」
――いいの！とにかく！とにかく私は強くならなくちゃいけないの！

あのとき、ディアは真剣な眼差しをしていた。
もし、ディアが１５歳になれていたら――本当なら、ここにいるのはディアのはずだったんだろな。
ゆっくりと、冷たい空気が体を満たしてく。次第に意識がはっきりしてきた。
真っ白な天井。固めのベッド。ここは医務室だと分かる。
「あぁ……ディオ。起きたか」
カーテンが開かれ、出てきた顔は、どこか疲れていた。
「うん、ちょうど今さっきね」
すると、ヴェイルの後ろから、もう一人女性が出てきた。
「お腹の調子はどうかしら？」
独特な口調のマレンダ先生だ。
「……うっ」
やっぱりまだ痛みを感じる。まあちょっとぐらい寝ただけじゃあ変わらないか。

顔をゆがませる僕を見て、ヴェイルは目をそらし、つぶやく。
「……ちっとばっかやりすぎたか？」
「今回のはかなりやりすぎだよホント！」
「んー、一応塗り薬渡しておくわねえ。お大事に。あと、ヴェイルくんもほどほどにね。ディオくんの力を見極めてから特訓をはじめないと、彼が成長できないわよ」
「以後気を付けまーす。あ、でも俺の出番はもうないんじゃねえの？」
ヴェイルが、同意を求めるように、僕に視線を移す。
「あぁ、そっか……明日からは新しい講師がつくんだった」
なんだか怖そうな子だったけど。
「まあ寮に帰ろうぜ。暗くなる前に」

夕焼け。黄金色の光が街を照らしてくれる。晩ご飯の準備のためか、たくさんの人が通りにあふれかえっていた。
寮は学校から少し遠い。毎日歩かせて、体を鍛えさせるという目的があるらしいが、実際効果があるかどうかはわからない。
なんとか人が空いてるスペースを見つけてはそこに身体をすべらせ、ヴェイルと歩いていた。
「……腹、大丈夫か？」
口角をあげながら、訪ねてくる。少しにらむ。
「自力で歩ける程度には回復したよ」
「よしよし、その調子なら明日には治ってるな」
「それはない」
「……そうかよ」
なんだか、やっぱり、少し違和感がある。
「ヴェイルさ、なんか……元気ない？」
「は？」
「いつもと違って、話し方に魂がないというか死んでいるというか……ぼーっとしてるようなしてないような」

「恐いことをさらっと言うなよ」
ヴェイルが引きつった笑みを浮かべる。そして、自虐的に鼻を鳴らす。
「改めて――俺は弱いんだなって思ってよ」
「よわッ？」
周りの喧騒に負けないように声を張り上げた。
「な、なに言ってるんだよ。だったら僕はどうなるのさ」
「お前を迎えに行く前に、すっげえ可愛い女の子と一発戦ったんだ。校章の色が赤だったから――ディオとおんなじ一回生だな。……お互い本気で戦ってはなかったけど、明らかにあっちの方が上手だった。女の子だぜ？なんだよあの動きといい、力はよぉ」
顔をゆがませ、舌打ちをする。なるほど、そういうことか。
「ヴェイルがそこまで言うなんて、すごい子だったんだね」
素直に述べると、鼻で笑われた。
「そんなに買いかぶる必要ねえって。まだまだこれからだな」
そう言うと、大きく息を吸ってから空を見上げる。その目はなんだか辛そうだった。
ふと、疑問が頭に浮かぶ。
「あのさ、ヴェイルは……なんで軍学校に入学するって決めたんだっけ」
驚いたように目を開く。
「覚えてねえのか」
なんだかがっかりしているように見える。
「そりゃもちろん……まぁ今は語る気分じゃねえや。また今度」
街を抜ける。人ごみから離れたことによって、お互いの声が聞き取りやすくなった。
「ディオは……なんで入学してきたんだ？」
だから、聞かれたくない質問をされても、無視するわけにはいかなかった。
その場を取りつくろう言葉を探す。でも、思いつかない。

「……あ、えっと」
返答に困っている僕に見かねたんだろう。ヴェイルは、小さく笑ってから、
「やっぱ言わなくていいわ」
「ごめん」
反射的に出てきた言葉。
「いつかは話してくれよな」
ためらいがちに首を縦に動かす。
……いつか、か。
いつかって……いつだろう。

四章〜強さなんていらない、はずだった〜

僕の妹は昔からずっと、後ろについてきた。なにがあっても、どこにいっても、振り返れば必ず妹の姿があった。
でも、ある日気づいたら、妹はいなかった。
自分から、武技の特訓を始めていたのだ。
小柄な身体とは不釣合いな木刀を、ふらつきながら振り回していた。
「どうしたの、ディア。木刀の素振りなんかして……」
——安心して。お兄ちゃんは私が守ってあげるから！
まさか、妹にこんなことを言われるなんて思っていなかった。こういう台詞は、普通、兄である僕が言うべきだ。あっけにとられている僕を差し置いて、続ける。
——私、15歳になったら絶対にペルクール学校に行く。
ペルクール……ヴェイルが行く軍学校？
——それでね、強くなって戻ってくる。お兄ちゃんもこの村も、私が守るよ。
このとき、ディアは8歳。ませたことを言いたがる年頃だ。言ったことなんてどうせ明日にでもなれば忘れる。
「……そっか」
そう思っていた。
——お兄ちゃんは？
「ん？」
ディアは木刀を降ろし、顔をこちらに向けた。
——だーかーら、お兄ちゃんは、将来なにがやりたいの？
答えは決まっている。考えるまでもない。
「わからないよ。今は、ない」
とたんに、妹の顔に喜びが現れる。
——だったら私と一緒にペルクールに行こ！強くなろうよ！
「嫌」

――なんで！？
やれやれ、と息を吐く。そして、同じ視線になるように、膝を曲げる。
「ディア、軍人になってどうするの？この国の軍人さんがなにをやってるのか知ってるの？」
――それは……知らないけど。
「今、僕たちの国はどことも戦争をしていない。周りの国は冷戦状態だけど。まあ、ここが巻き込まれる可能性はない。でもね、万が一という時のためにあの軍学校で戦力になる人たちを作っているんだ」
この前ヴェイルから聞いたことを、そのまま伝える。目の前の少女は難しい話に首をかしげた。
――だから？
「僕たちが強くなる必要はない。他の人たちが守ってくれるからさ」
――どうして？　力がないと、自分の大切なものは守れないんだよ。いつか、失っちゃうんだよ。それでお兄ちゃんはいいの？
「失うもなにも、大切なものを奪う人なんてこの国にはいないから。だから、強くならなくてもいいんだ」
しょぼくれた頭に手を乗せる。
「いざとなれば軍が守ってくれる。だから大丈夫だよ」
――本当かな。本当に？
不安そうに見つめてくる目を安心させるように、つぶやく。
「大丈夫。絶対に大丈夫」

そのあと、ディアはそれでもペルクールに行くと言い張った。猛反対していたが、最終的には僕が折れた。
――自分のやりたいことをさせたほうが、ディアのためになるだろ。ディアはお前がいなくても頑張れるさ。
ヴェイルが悟るように言ってきたからだ、

――私、１５歳になったら行ってくるからね！
そういう妹にただうなづくことしかできなかった。

――ディオへ
――お前の誕生日に、一度村へ帰ろうと思っている。多分、村に着くのは早朝になるだろう。
――ディオの十五回目の誕生日はディアと一緒に盛大に祝おう。まるで、親みたいなことを言うんだな。小さく笑う。
手紙をそっと机に置いて、吹き抜けとなっている二階に声を張り上げた。
「ディア！」
「なあに？」
ひょっこり、と呼ばれた妹の頭が出てくる。
１３歳にしては、子供っぽさが残っている顔。僕と同じ色の茶髪が、セミロングまで伸ばされていた。寝る前だったので、もちろん着ているのは寝巻き。
「ちょっと外に行ってくるよ」
「真夜中だよ？なんで？」
不安そうに、胸に手を当てている。安心させるように、微笑む。
「明日はなんの日？」
「お兄ちゃんの十五歳の誕生日」
笑顔で即答。僕も笑顔で、問いかける。
「ヴェイルはいつ帰ってくるって言ってた？」
「あ！迎えに行くの？私も行く！」
「子供はもう寝な」
そういうと、ディアは頬を大きくふくらませる。
「私子供じゃないもん。二年後にはペルクール学校に入学できる年だもん！」
ある日を堺に、この子はなにかとあれば、すぐにペルクールを出

してくる。
「……はいはい、分かった。でも、行くのは僕だけいいから。ちゃんと寝ておくこと」
「連れてってくれないんだ、ケチ」
それじゃあ、と僕は玄関の近くに掛けられていたコートを羽織り、真夜中の外へ出ようとした。
「待ってよ」
なんだか震えた声で静止を求められた。
「どうしたの？」
ディアは急ぎ足で階段を駆け下りてきた。
「なんで行くの？ヴェイルくん、明日になれば村に着くんでしょ。わざわざ迎えに行く必要なんてないじゃない？」
言いながら、僕の目の前にたどり着く。
「やっぱり早く会いたいからかな。ちょっと様子を見に行くだけだから。姿が全く見えなかったら帰ってくる」
ディアは不満そうに口を尖らせる。
「……なんでお兄ちゃんだけ」
「お兄ちゃんだから。いいから、ほら寝てきな」
背中を強く押すと、ディアはいつもより、遅めの速度で階段を昇る。
「お兄ちゃん」
少女が足を止めて、振り返る。そこには最高の笑顔が浮かんでいた。
「えっとね……15歳のお誕生日おめでとう」
「ちょっと早いよ？」
「いいの。一番に言うのは私なんだから。ヴェイルくんに一番は渡さない」
リズミカルに駆け上がる。最後に、顔だけこちらに向けて、
「いってらっしゃい」
にこやかに手を降ってきた。もぞもぞと布団に潜りこむ音がする。

「すぐ帰ってくるよ」
返事はなかった。

もちろん、夜なので外を出歩く人なんていなかった。
土がむき出しになっている道を歩き出す。
ヴェイルに会うのは何ヶ月ぶりだろうか。長期休暇の度に帰ってくるが、やっぱり学校が遠すぎるため滅多に会えない。
多分、ディアは今回もヴェイルにくっついてペルクール学校のことを聞きまくるはずだ。何年経っても、妹の決意は変わらず、か。
もう、好きにすればいい。
「……ん」
さっきどこからか悲鳴が聞こえたような。
「……」
獣の声かなにかかな。
「……」
違う！　後ろを振り返る。村方面？声はたしかにこっちから聞こえた。
急いで来た道を引き返す。心臓の音が少しずつ大きくなる。変な汗が体から吹き出てきた。
近づけば近づくほど分かった。ろうそくの光と比べ物にならない、異様な明るさ。
「火？家が燃えてる！？」
火事か？それもひとつの家じゃない。結構な数の……火事？自分の出した推測に違和感を抱く。
村に足を踏み入れたとき、体が固まった。
辺り一面炎だ。火事なんてものじゃない。まわりのもの全てが燃えていた。
それだけじゃなかった。なんだ……このにおい。まるで、血みたいな……におい。みたい、じゃない。
人が倒れている。そして、誰もが例外なく血を流している。

「……え？な、なにこれ」
村のみんなが、倒れてる。
「嘘、でしょ。どうなってるのさ」
炎のなかから、黒い物体が飛び出してくる。思わず身構えた――
しかし、それは人だった。しかも見知った顔の。
「おじさん！？」
ヴェイルのおじさんだった。ぐったりとし、動く気配がない。あわてて駆け寄り、身を起こす。
「おじさん！一体なにがあったんだ！？」
ぬちゃり。文字にすると、そんな音がした。自分の手におそるおそる目をやる。赤い液体がべっとりとついていた。
血……おじさんの血！叫びたくなる衝動を抑えて、おじさんに呼びかける。
「聞こえる！？おじさん！」
ゆっくりと目が開かれる。よかった、生きてた。
「ヴェイル……か？」
ひゅー、と息を吐きながらおじさんはつぶやく。
「違う！僕だよ、ディオだ！」
「……ヴェイル、逃げろ」
「だから僕は……」
「やつらはイル・モンドだ」
「イル・モンド？なんなのさ、イル・モンドって！」
「……逃げろ、ヴェイル」
「な、なに？なにが起きてるのかわからないんだよ！僕はどうしたらいい！？」
「……だか……ら……逃げ……と」
開かれていたまぶたが閉じていく。
「おじさん？しっかりしてよ！！おじさんってば！！」
炎の壁を通して、少女の悲鳴が聞こえた。僕は、そっちへ目を向けた。再び炎からなにかが飛び出してくる。

やっぱりそれは人だった。しかも、今度は体と垂直になる形で、ナイフが突き刺さっている。
「……大丈夫っ！？」
あ、あれは。僕の頭が現実を拒否している。目の前の出来事を受け入れようとしてくれない。おそるおそる近づき、顔を確認する。
「……あ、ディア、なのか？」
ナイフが刺さっている少女、それは、間違いなく僕の妹だった。
悲しみを感じる余裕なんてない。なにが起きてる？たった数分で、どうしてこんなことに？
ついさっきまで……この子は笑ってたのに。
「ディア？……聞こえる？」
血が、止まらない。僕の手を伝って、地面へと流れていく。
「……ねえ、ディア。僕の声が聞こえないの？目を開けて」
でも、体を激しくゆらしてもディアが目を覚ます様子はない。自分の手についた血。これは、おじさんと――ディアのもの。
頭上から視線を感じる。そこには、人がいた。頭の先からつま先まで、真っ黒。表情はわからない。性別もわからない。
「……誰だ？」
本能的に危険を感じる。黒づくめは、ゆっくりと近づいてきた。早く逃げないと。でも、体がこわばって動けない。
「……誰、なんだ」
黒づくめは、ディアにそっと手を伸ばしたかと思うと、体に突き刺さっていたナイフを抜き取った。同時に、眼前を鮮血が舞う。傷口から、再び血が流れ出す。
「な、なにす……！」
ナイフの刃先が、こっちに向けられた。
「逃げ……ろ……。ディ……オ」
おじさんの声。本当に小さな声だったけど、僕には聞こえた。最後の力と言わんばかりに、おじさんは目を見開いた。
「一人だけでも、生き残れ！」

うなづく。
ディアは死んだ。みんな死んだ。そう言いたいんだ。
黒づくめが、ナイフを持つ手を振り上げる。
やられる！しかし、そのナイフは僕を通り過ぎた。重く鈍い音を立てて、それは、おじさんに刺さった。
それを見た瞬間、僕は走った。村から逃げ出した。情けない？そんなの自覚している。でも、あのまま殺されるより、少しは抗ったほうが……いいんじゃないか。
自分の荒い息を一緒に、村から聞こえる絶叫。僕はみんなを見捨てた。
ごめんなさい。僕が強かったら、こんなことにはなってなかったのに。強さなんていらないって思ってたのに。
後ろから足音。しかも、自分より確実に速い。黒装束が追ってきている！月明かりに照らされて光る、ナイフ。初めて味わう、死の恐怖だ。
このままだと追いつかれる。そう察して、隣の茂みに逃げ込む。無論、相手も付いてくる。しかし、木々に邪魔されてうまく進めないみたいだ。
でも僕は違う。小さい頃からこんなところばかり歩いてきたんだ。スピードの方はこっちが勝っている。
「ん？」
ふと、振り返る。誰もいない。……振り切ったのか？ふぅ、と安堵のため息を吐く。
「うぁっ！」
しかし、気を抜くのは早かった。
上からなにかが落ちてくる。そのなにかが黒装束と判断する前に、僕は後ろから押し倒される。と思ったら今度は、背中を木に押し付けられていた。身動きができない力で、胸を圧迫してくる。
速すぎて……動きが見えなかった。なんなんだ、こいつ。
「……イル・モンド？」

苦しまぎれにつぶやく。黒装束は答えない。
「みんなは、ディアは……殺されたのか？」
黒装束に動きがあった。顔がゆっくりと上下に動く。それは間違いなく肯定を表していた。
信じたくなかった。でも、僕は見てしまった。妹の胸に刺されたナイフを。
ついさっきまで笑っていたディアは、死んでしまった。僕はたった一人の家族さえも失ってしまった。
首筋になにかがあたった。なにかなんて考えるまでもない。黒装束の握るナイフだ。生臭い臭いが鼻につく。きっと、この剣で何人もの人を殺してきたんだろうな。
そして……僕も、僕も殺されるんだ。
「あんたたちが……殺したんだね」
目の奥が、かっと熱くなった。喉からこみ上げるおえつを飲みこみ、黒装束をにらむ。
「なんで……殺した？」
僕が発したのは、悲鳴でも命乞いの言葉でもない。問いだった。
今までずっと無言を貫き通していた人から、返事があるなんて思っていない。それなのに、僕は聞いていた。
「……」
やはり口は開かれない。耳に入ってくるのは、遠くからかすかに聞こえる絶叫と、葉がこすれあう音だけ。
「答えて……答えろ」
涙がこぼれ落ちそうになる。しかし、強く唇をかんで耐えた。口の中に、鉄の味が広がる。でも、痛みは感じない。目の前のできごとで頭が埋めつくされている。
息を肺一杯に吸い込み、叫んだ。
「なんでディアを殺したんだ！」
「……」
黒装束の力がさらに強くなった。まるで、黙れと言いたげに。

呼吸するのも苦しい。必死に意識を働かせ、体のなかに酸素を取り込む。すると、黒装束が視界から消えた。違う、横に吹っ飛ばされたんだ。
「なにをもたついてる！」
もう一人黒装束がいた！しかも、真剣をもっている。
突然やってきた黒装束は、背が高かった。こちらを見下ろしてくる。
死ぬ。今度こそ死ぬ。
「……少年よ」
長身が、重々しく口を開く。
「な、なに？」
「私と戦うか？」
「……え？」
いきなりなにを言い出すんだ。
「戦って、貴様がそれなりの実力を持っている、と私が判断したら仲間に入れてやろうか？そうすれば、ここでのたれ死なずに済む。どうだ、ん？」
「……イル・モンドに入る、ってこと？」
このわけの分からない集団の仲間に？
「ほぉ……イル・モンドを知ってるのか。ほら、ナイフならそいつが持っている。戦え」
そいつというのは、僕を追ってきたほうの黒装束のことだ。
僕は首を降った。
「嫌だ。仲間になるぐらいなら……僕は死ぬ」
「それは、自分が弱いからか？」
「……それもある」
「弱き者なんて存在する価値もない。死ね」
「それだけじゃない。もし……自分が強くなっても弱い人を傷つけるのは、心が弱い証拠だ」
言いたいことは言い切った。僕はそっと目を閉じる。

「殺したら……いい」
バカ。なに震えてるんだ。仕方ない。……死ぬのは、やっぱり怖いから。
「痛いのは一瞬だ――ガキ」
死。
肉に突き刺さるような嫌な音。
……死？
痛……くない？目を開ける。
「えっ？」
長身が倒れていた。もう一人の黒装束が握っているのは、血のついたナイフ。まさか……長身を刺したのか！？
「なにをする！！」
長身が起き上がろうとした――しかし、そこへ黒装束が地面へと押さえ込む。
な、仲間割れ？
黒装束が、こっちへむいた。そして、僕の後ろを顎でしゃくった。逃げろ――ということ？助けてくれた？敵が？
出来事が頭で処理しきれない。とりあえず、僕はその場から走り去った。
走って走って……ヴェイルに会おうとした。ヴェイルならなんとかしてくれるはず。
すると、前方に動くものが見えた。
馬車だ！あのなかに、ヴェイルが……いる、はずだ。
大きな安心感。体の脱力感。僕はいつの間にか、道に倒れ込んでいた。
「うわわわわわ！！ひ……人がぁっ！」
御者の悲鳴が、耳を突き刺さった。と、同時に馬車が大きな音を立てて止まる。後ろの客室から、鈍い音がした。
「いてて……人が寝てるってのに、えらく乱暴な走りだな？おい」
「ど……どうしましょう！人が……！！ひひひ人が倒れてる！」

「はあ？……人だぁ？」
「と……とりあえず……外に出てきてくださいよ！」
「……あ？」
出てきたのは、久しぶりに見るヴェイル。
これで……本当に助かった、んだ。
「おいっ！ディオじゃねえかッ！！しっかりしろ！どうした！？」
……うわ、大きな声。
「村……行ったら……だめ……」
「……村？なんでだよ！？おいディオ！」
そこで、僕は意識を手放した。

十五回めの誕生日、僕の村は壊れた。

四章～強さなんていらない、はずだった～（後書き）

遅くなりました。すいません。
読んでくれた方、本当にありがとうございます！

五章〜少女は堅実な意思を手放せない〜※イラ付

「……」

私は再び振り返った。

視界に入るのは、真昼の光が降り注ぐ、にぎやかな渡り廊下。午前の授業が終わったということもあり、たくさんの生徒が談笑しながら、通っていく。

……いる。こそこそと。誰かが私についてきている。

はじめは気のせいかと思った。でも、違う。歩くスピードが同じ――まあ、これぐらいならよくあることだ。

しかし、私が立ち止まれば、向こうも止まる。そして、私が歩き出すと、向こうも動き出す。

これを不審者と言わずになんていう？

めんどくさい。全力疾走で立ち去ろうか。……でも、変なやつを学校に居座らせておくのも……ね。

ちょうど、木刀もあることだし。一発こらしめてやりますか。

一直線に続く廊下から、わざと横にそれる。暴れるなら――とりあえず、人気の少なさそうな場所がいい。

芝生を歩き、建物の影になりそうなところへ誘いこんだ。こんな日の当たらない庭で、昼食をとる人なんてなかなかいないだろう。

遠くに聞こえる笑い声を背に、私は、木刀を握りしめた。

さぁ、私が狙いだというなら、今が絶好のチャンス。

……来るなら、こい。

何かが動く気配――そして、こちらに近づく足音。瞬時に目を向け、敵の確認をする。

先手必勝！まずは一発――！

――あ。

私の動きが止まる。敵が木刀を振り下ろす。あわてて防御。

「……あ、あの？」

なんと反応していいものか……。
相手はバックステップで距離をとり、防御体勢をとる。あれは……私からの攻撃を待っている。
間違いない。紙袋をかぶって変装をしているつもりかもしれないけどあれは――
「……ヴェイル先輩ですよね？」
……ううん、確認する必要はない。さっきのひと振りで核心できた。
「先輩……なにやってるんですか」
軍学校の制服を着て、顔は紙袋に包まれている……なんてシュール。
敵――いやヴェイル先輩は動かない。
「……先輩っていうのはもうわかってますから。紙袋とってください」
先輩が、紙袋をはぎ取り、険しい顔で叫ぶ。
「ディオ！」
「……え？」
「う……あああああああ！！」
すぐ後ろ。
――木刀をつかむ雑魚がいた。
「あああああああ……ふごぉっ！！」
スキだらけの構えだったので、容赦なしに肩を殴る。
「……不意打ちをねらってんのに、叫びながら来てどうするのよ」
アホにも程がある。
「……あ、あああぁ……」
「ディオ――！」
苦しみもだえてるディオに、先輩は切羽詰った表情で駆け寄る。
「……ヴェイル……やっぱりこの作戦は駄目だったみたいだね」
作戦、か。
どうせ、先輩が戦ってる間に、雑魚が私に一発でも打つ！そうすれ

ば、ディオの評価も上がる――とかそんなものでしょ。
「俺が戦ってる間に、ディオが女の子に一発でも打つ！そうすれば、ディオの評価も上がると思ってたんだが……悪い」
そのまんまだった。
「……なんでこんなことしたんですか？」
「先に言い出したのはヴェイルだよ！？僕は巻き込まれただけ！」
「昨日のリベンジがしたかったんだよ。あ、ついでにディオの講師ってのがどんなやつか気になった、っていうのもある。まさかカランちゃんだったとはなぁ」
「……はあ」
……帰ろ。
「待て待て待てカランちゃん！！」
先輩に名前を呼ばれ、振り返る。
「名前、なんで知ってるんです？そういえば私、自己紹介してなかったですよね」
すると、ディオが小さく手をあげる。
「先生から聞いたんだ。昨日、医務室で会ったけどまともに挨拶できてなかったしね」
なるほどね。
「カランちゃん！」
「は、はいっ？」
先輩は、真剣な眼差しで見つめてきた。
「な、なんでしょう？」
「ディオを……」
「はい」
「ディオのこと、よろしく頼むわ」
この人は、本当にディオのことを大事に思ってるんだな。
「……はい、できる限りのことはさせてもらいます」
カーンカーンカーン
鐘が鳴った。もうすぐ午後の授業が始まる。

「ってわけであとは頼んだ！」
言うなり、全速力で去っていく。
「あ、ヴェイル！紙袋忘れてるよ！」
「やる！」
「いらん！……カランさん」
「いらん！」
納得いかない表情で、ディオは紙袋を制服へとしまう。
「なんで僕が……って僕も授業あるんだった！！」
バカだ、この人。
「待って、午後の授業は私と特訓よ」
「……へ？」
「訓練場は授業で使われてるだろうし、ここでいいでしょ」
「ちょ、ちょっと待って。特訓は授業が済んでからじゃなかったの！？特別生徒用訓練室で集合って言ってなかった？」
「それはそれ。今はこれ。ほら！さっさと木刀握って！」
「……え？えぇ？」
状況をいまいち理解できてないのか、おろおろしている。
「行くわよ！」
「えええええええええっ！？」

＊　＊　＊

学年の底辺？学校一の雑魚？手に負えない問題児？
ひどい言われようだとは思っていた。……でも、これはそう陰口を叩かれても仕方ない。
私は、気を失いぐったりとしているディオを見下ろし、ため息をつく。
あ……ありえない。
「ねえ、本当に起きてないの？」
木刀で頭をつついても……反応なし。再びため息をつく。あのね

……私、お腹を軽く押しただけなんだけど。
「うっ」
苦しそうに顔をゆがめる。まあ、生きてるのね。
ふと、思い出す。そういえば昨日、お腹にあざが出来てるとか言ってたっけ。治りかけのところを、やってしまったのか。それは……悪いことをした。
「雑魚？聞こえてるんなら返事なさい。医務室に連れてってほしい？いらない？」
「い、医務室へ」
仕方ない。背負うか。……軽いな、この人。
「ごめんね……ありがとう」
「いい、これぐら……」
言ってから気づく。
「……」
……なにやってるんだろ、私。

＊　＊　＊

「失礼します」
やけに静か。マレンダ先生はいないのかな。もしかして……また出張？
とりあえず、ベッド貸してもらおう。と、カーテンを開けた。
「わっ」
いた。先生がベッドで寝ていた。すやすやと。気持ちよさそうに。
起こすのも悪いので、もうひとつのベッドにディオを寝かせる。
どうやら、この人も寝てしまったらしい。
……お気楽な人だ。髪の毛全部むしりとってやろうか？……一本ぐらい、いいかな。
そっと手を伸ばす。一本だけ――一本だけ。
「かわいいわねえ、ディオくんの寝顔」

「わあああ！？」
すぐ耳元で声がして、思わず、壁へ逃げる。しまった、つい勢いで三本抜けた。
「お、驚かせないでください。マレンダ先生」
「あらぁ？そんなつもりはなかったのよ、ごめんなさいね」
私に近づいてくる気配なんて……全くなかった。
先生は、ディオの顔にかかってる髪を、丁寧に手ではらう。
「……ふふっ、かわいい寝顔。食べちゃいたいぐらいねえ」
「それ、本気で言ってるんですか？」
「嫌だわ！カランちゃんったら嘘に決まってるじゃない」
目が本気だったんですけど。
「……い、嫌だわ」
なんで二回言うんですか……。やっぱりちょっと本気だったんですね。
「なによぉその目は。……で、なんの用？あなたたち、午後の授業があるんじゃないの？」
まさかサボリ？と、先生が眉をひそめる。
「いろいろあって……すいませんが、この人をしばらく休ませてあげてください」
「ふぅん、ディオくん、昨日の怪我はひどかったものねぇ……。いいわよ」
私はお礼を言ってから、近くにあった丸いすに座った。先生も、もうひとつの丸いすに腰をかける。そして、再びディオ観察。
……あぁ、もしかして。
「先生、弟とか妹がいるんですか？」
意外そうな先生と目が合う。
「あら、なんで分かったの」
「その……ディオを見てるときの目が優しかったので……さっきとは違い」
「一言余分だけど……。そうそう、たくさんいたわよ。みんな、血

はつながってなかったけどね」
……余計なこと聞いたな。
「すいませ……」
「いいわよ、ひまつぶしだと思って聞いて。……私ね、物心がついたときには一人で生活してたの。ちょっとした貧民街のとこでね。あ、どうやって食べていってたのかは聞かないで」
人差し指を口に当てて、頭を下げる。……盗みとかしてたんだろう。大体分かる。
「でね、私よりも小さい子たちもそこで生活してたのよ。でも、あそこは危険。強い人が生き残れて……弱い人は死ぬ。そんなの、子供たちなんて、みんな死んでしまう。嫌でしょ、そんなの。だから、周りの子たちを集めて、私がお姉ちゃんになろうって決めたの。単純かしら」
「そんなこと、ありません」
先生は、懐かしむように、目をふせる。
「……毎日大変だったけど楽しかったなぁ。みんなのおかげで」
「……あの、なんで軍学校の先生になったんですか？」
ふとした疑問を投げかける。すると、先生は意表をつかれたように目を開く。
「うーんとね、それはねぇ」
子供らしい仕草で考え込む。
「な・い・しょ！」
年を感じさせない笑顔だった。
「カランちゃんはどうなの？兄弟いるの？」
「わ、私ですか」
まさか自分にふられると思わなかった。
「……います。先生と同じで血のつながりはないんですけど」
頭の中に思い浮かぶのは、小さな女の子。
「意地っ張りでそそっかしいけど、優しくて、私のことを大事に思ってくれる……とってもいい子なんです」

＊　　＊　　＊

寒い。体の冷えのせいで、目が覚めた。
あっ！？……いつの間に寝てた！？
「あらぁカランちゃん。起きたの？」
後ろからはマレンダ先生の声。お菓子まで用意して優雅に、ティータイムですか。
「私、寝てたんですね」
振り返るとき、肩にかかっていた毛布が落ちた。先生がかけてくれたんだろう。……優しいな。
ディオは……と、まだ寝てる。
「ディオくん、一回起きたのよ？」
「そうなんですか？」
「でも、あなたが寝てるって分かったらまた寝ちゃった」
二度寝！？ふざけてるな。
「けど、そろそろ起こしてあげたら？午後の授業はとっくに終わってるわよ」
と、先生が時計を指さす。
「もうこんな時間っ！？」
椅子を蹴飛ばす勢いで立ち上がる。
「ちょっと失礼します！」
「え……えぇ？」
全力で走って向かう先は――談話室。

＞ｉ３８６４４－４０５８＜

＊　　＊　　＊

「……」

「……」

「……カランだけど！ごめん、遅くなって！」

「ちょっと？……聞こえてる？ねえったら！」

「……あ、あれ。どうして、あなたが……。あの……エレナは」

「そ、うなんですか。すいません、大きな声を出してしまい……」

「……もちろん……お、覚えています」

「大丈夫、です。……わかってます」

「……はい。それでは……失礼します」

なんで……なんであの人が……電話に出るの。

――なぜ、お前を軍学校に行かせたか……わかってるな。

そうだ。私は……軍人になりたくてここに来たわけじゃない。

やらなきゃ……殺らなきゃ……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0659x/

師弟関係の僕ら

2012年1月8日19時48分発行